

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
個人研究費
2007年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	文学部・教授	野中健一 印
研究課題	文化環境学の構築に向けた人間-環境関係の図示表現手法の開発	
研究期間	2007年度	
研究経費	500,000円	

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究は、「文化環境学」において重要なカギとなる「人間性」と「空間性」に注目して、文化と環境との相互作用を説明し、研究成果を広く一般に示すための一方法として、イラストを用いた表現方法を構築することを目的とした。文化環境学の研究対象である、自然と社会をつなぐ関係性、現象とその要因の構造および相互作用、主体-環境の空間性をわかりやすく表現するために、それらを統合的に示すためのイラスト技法を構築した。

本研究によって、イラスト表現が、人間性の感情の表現、時空間の変化、相互作用を統合的に説明するのに有効で、環境要素・空間構造とそれらの関係について効果的に理解を促すことが可能であることが明らかとなった。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[文化環境学] [関係性] [空間表現]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、文化環境の概念および現実の相互作用の世界をわかりやすく説明するための、人間－環境の関係性の図表現の方法を作ることを本研究の目的とした。研究動向を整理する事による概念検討、事例研究を実施した。

1. 概念検討

文化環境学における相互作用をどのように示すか、その概念検討を学説史的な側面から行った。文化と環境との相互作用は、人間と環境を構成する諸要素の存在・行為・結びつき・変化が組み合わさって起こっている。この結びつきと組み合わせり方(関係性)を明らかにし、そしてその要因や因果関係を解明することが文化環境学の理論的枠組みである。それにもとづいて、具体的な人々の認識、活動、地域性、生態史(環境変化・社会変化)、を方法論的枠組みとして軸として、現実世界に起こっている「人間の環境の生き生きとした関係」として現れている姿を体系的に理解する。その相互作用を解明するにあたって、人々の環境への働きかけという主体的行為に注目すること、すなわち、「なぜそうするのか?」という人間性の内面を実証的に解明することが求められる。すなわち人間性に注目することである。それは、まず、第一に人々の対象(環境要素)に対する感性と感情からとらえることができる。そのような人間の理解があって、社会・文化の多様性や環境問題への関心という豊かな人間の理解と現代社会の問題解決への視座が生まれるであろう。文化環境学において、文化の主体たる人間に着目すること、そしてその活動を環境への働きかけとして示すことが必要となる。

しかし、人間性は内面的なものであり、さらに環境という現実的・空間的要素とを合わせて分析しその結果を説明することは、しばしば困難を生じる。環境要素の存在を空間的かつ変化する状況的なものとして説明するには、相互関連を空間的に位置づけることが有効である。そこで、本研究では、主体－環境の関係性を可視化することによって、それが可能になるのではないかと考え、イラストの技法を適用することが良いのではないかと考えた。イラストの特性は、可視化、行為の描写、感情表現、単純化と強調、定式化された技法を有する点にある。とくに主体の動き・感情や空間表現および時間の流れや変化を表すストーリー構成においてイラスト描画の方法は適している。それは、共通認識されたルールをもって定式化されているため、写実的なあるいは抽象的な絵画とは違って、描画者の心象ではなく、対象となる人々の意識に基づいて事実を描写することができる。そのため、研究対象とそれを理解する者(読者)の間で共通の理解を可能とする。

以上の観点にたって、それをを用いることによって、人間性と空間性に注目してその形成プロセスとインタラクションを示す方法が実現し、文化環境学の理解と活用のために有効となろう。自然・社会・文化が合わさっている動きのある生きた世界として図化し、その場所に生起する人間の活動を感情とともに空間的に構成する新しい図表現を、「地理イラスト」と称することが適切であることに至った。

研究成果の概要 (つづき)

2. 事例研究

自然への働きかけとその価値観(人間性)とそれらが生起する場所(空間性)に注目して、人間と自然との相互作用を説明するための手法の一つを作った。

その課題は、1)文化環境学の枠組み、2)活動-環境多様性と住民生活、3)認識-地域環境の発見と地域住民との関わりあい、4)生態史-環境変化・社会変化に対する人びとの対応を表現することを目指した。事例研究では、文化環境学の扱う範囲を勘案して、①ラオスの水田稲作と資源利用、②長良川流域における水産資源利用と流域開発による影響、③岐阜県山村におけるクロスズメバチ食慣行の環境へのインパクトを取り上げた。

空間的な図で表現するにあたって、従来の自然と人間の関係の単純モデルによって説明すると、自然と人間という大きな要素が対立するものではなく、相互に関連し合うところが自然と人間とが交わる集合(交差)部分であるという概念的な位置づけが明確に示される。しかし、これでは、a)おのおのの要素が何なのか、図に説明を加えなければ分からない、b)各要素の相互関連を説明するにはより複雑な相互関連を示す項目とその内容説明を要する、c)時間の流れによる要素間の結びつき方を示せない、d)ある場所での各要素の展開を示すにはさらに内容説明を要する、という問題を解決できない。要素を記号化することによって、明確に示すことができるが、要素の多元的側面を一つ一つ抽出して、その関連性を示そうとするにつれて図が複雑化していく。複数の要素が入り混じった自然-人間関係を多元的に一つの図で示そうとすると限界がある。

そこで具体的なイラスト表現を行うことによって、要素の具体的な姿、形、行為、位置関係を構図による配置を示して、多重的・多元的に1つの図に収めることができる。これによって、以下の点が明示されることが実証できた。a)具体的な事物の絵になっているために、専門家でなくても予備知識を持たなくても理解しやすい、b)描かれた要素の活動とその前後の活動を想起させ、他の要素との関連がわかる、c)時間の経過を伴った相互の結びつき方が示される d)対象となる要素の地域の動きを時間の流れとともに空間的な拡大や新たなネットワーク化として理解できる e)人工要素と自然要素が混在し、なおかつそれらの相互のつながりがわかる f)要素を結びつける記号、アイコン化により相互作用がどういうものなのか説明できる。

これらの具体例によって、環境の変化・動き、人々の行為を示し、環境に対する可変的視点のダイナミックでかつリアリティのある表現を可能とすることができた。

地理イラストによって、読者はまずその全体像(空間、要素、出来事)を視覚によって直感的に捉えることが可能となった。そして、それを構成しているそれぞれの要素の形、大きさ、位置関係、表情などで要素同士の関係性や細部について、マクロからミクロまでのスケールの変化に対してつながりをもって連続的に理解する事ができることを示すことができた。作例を論文の考察のまとめとして示したり、単行本の冒頭に示すことにより、地域への関心の導入や細部への関心を高めることができた。

以上の研究結果により、人間の活動結果や分類を前提とした記号化や正確なスケールを前提とした従来の静態的な「地図」やモデル図から、環境と人間が結びついていることを動的に説明する新たな空間表現体系としてその概念を示すことができたといえる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①
Kenichi Nonaka 'Nora' - Land-space where a harmonious relationship exists between humans and nature, *Shien*, 68-3, 118-126.

②
野中健一 『虫食む人々の暮らし』 NHK出版、2007、219頁。
野中健一編 『ヴィエンチャン平野の暮らしー天水田村の多様な環境利用』めこん、2008、253頁。

③
「四次元で描く地誌：ラオス・ヴィエンチャン平野の多様な資源利用とその背景」
日本地理学会秋季学術大会、2007年10月6日、熊本大学。

Loving Yellow-jacket - Food Habit of Insect-eating in Japan. FAO, 2008.2.18, Chaing Mai, Thailand.

Nonaka K. Ecohistory of Fisheries in the Nagara Estuary. *Dynamics of nature and society in estuarine to coastal regions - toward Asian sustainable resource-use model*, 2008.3.13 Mie University, Tsu Japan.

④
Nonaka K. Inland Fishing in Japan. *International Seminar on the environmental histories of Europe and Japan Proceedings* 2008, 149-162.